

アレルギー



Japanese Journal of Allergology

第24回日本アレルギー学会春季臨床大会

会 期：2012年5月12日(土), 13日(日)

会 場：大阪国際会議場

会 長：片山 一郎

(大阪大学大学院情報統合医学講座皮膚科学教室)

JAPANESE SOCIETY OF ALLERGOLOGY

Vol.61 No.3·4 2012

一般社団法人 日本アレルギー学会

会長企画講演

PSL メタボリックシンドローム病態解明の進歩と免疫・アレルギー疾患との関わり

益崎裕章

(琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座 (第2内科))

かつて世界に冠たる長寿の島であった沖縄は今、日本屈指の肥満県、糖尿病県に転じ、平均寿命の凋落が続いている(沖縄クライシス)。本州に比べてファストフード上陸が20年先行した沖縄では小児期から米国型ライフスタイルの洗礼を受けた働き盛り世代を中心にメタボリックシンドローム、2型糖尿病、致命的血管イベントが急激に増加しており、定年前(65歳未満)死亡率は男女ともに全国1位となっている。生活環境要因としては夜型生活(生活リズム異常)、一家に3台と言われる高度自動車社会、長期間の過剰な脂肪摂取の影響が注目されている。我が国のメタボリックシンドロームは過栄養、運動不足、過剰ストレス、生体リズム障害に対して十分に皮下脂肪が蓄えられない体質(皮下脂肪機能不全)を背景に、余剰エネルギーが内臓脂肪肥満、そして、脂肪筋、脂肪肝、脂肪膵、脂肪血管となってアディポカイン(脂肪組織由来の生理活性物質)の分泌異常やインスリン抵抗性、臓器機能障害を引き起こしている(広義の“脂肪毒性”)。肥満の脂肪組織は局所的な栄養異常、低酸素、小胞体ストレス、酸化ストレスなど、多様な代謝ストレスに暴露されており(Olefsky JM et al. *J Clin Invest* 116: 33, 2006)、“慢性炎症の状態にある”ことも重要である。私達は脂肪細胞科学の研究を通して、肥満の脂肪組織における脂肪細胞ホルモン、レプチンや細胞内グルココルチコイド活性化酵素、11 β -HSD1の病態的意義を明らかにしてきた(Masuzaki H et al. *Nature Med* 3: 1029, 1997, *Science* 294: 2166, 2001, *J. Clin. Invest.* 112: 83, 2003, *N. Eng. J. Med.* 351: 615, 2004, *Cell Metabolism* 5: 395, 2007, *Am. J. Physiol. (Endocrinol Metab)* 298: E930, 2010)。レプチン受容体が担う視床下部シグナル経路や11 β -HSD1が担う脂肪細胞のグルココルチコイド作用過剰は創薬ターゲットとして臨床応用が始まりつつある。本講演ではメタボリックシンドロームの病態解明における最近の進歩を御紹介するとともに、メタボリックシンドロームにおける慢性炎症と免疫・アレルギー疾患との関わりについて考察したい。

略歴

平成 元年 京都大 医学部 卒業

平成 8年 京都大 大学院医学研究科 博士課程修了, 京都大 医学博士(分子医学専攻)

平成 12年 ハーバード大 ベスイスラエル・デーコネス医学センター 糖尿病・代謝・内分泌学留学, 客員助教授(ジェフリー・フライヤー教授, 現 ハーバード大学 医学部長)

平成 15年 京都大学 内分泌代謝内科 助手

平成 20年 京都大学 内分泌代謝内科 講師

平成 21年 琉球大学 大学院 医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座 (第2内科) 教授